



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN INCHES



八
4157
5

田村

中納涼千鳥

狂歌の成程て高き此編

五之巻目録

一 湾前ノ内同金

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る

本

十

公

岩

修

氏

情

あ

る



永田文庫

アカギ

56-4167



七
八
年
一
校

三
花も山吹楊風の太陽

女郎あ宝くわく右筆ねみ百あひ實むきす
用物のあれ事のよき祝ひ又是方のう
花車へそれちまくろあ様よりうす
ゆめにすうの

四
耳生
り女郎
一毛

楊貴の船も仕出へれど何よ中下流
あせ難收の停利男貨町らを車のす
体代の方の馬かねあや松葉扇相ひ

千鳥表之五

忠義之傳

（一）忠義と節と勇と剛と義理と情の義人
御大名方より内へ取扱ひを申す。御車を士町へ
近付け候事も御飯を下さるにまでも承
切りやうれ又はうる様もあく佐牌を打てば、官
横賊よりうりゆ
精とて町の上手下もかまうる事
いはし氣勢もあらゆる色を生み此時御用ひが
おきかへる事も多し。あるもの極きを頼ま
きを金浦貯貯（常川）軍人からまきとて八度書
生見をかりんへ風と野の野筋へ而とせり。生見
能ある意へ幼少より百事にあつて能くこれがたる

今を爲めにし家は今アリわ生れ未ゆるか年
ふはト一室作て而ハ數々クモモシ御也
中身一の事事つま。ご嘉女と貞年嫁ひの事
も多一が。此御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御
御御御御御御御御
御御御御御御御
御御御御御御
御御御御御
御御御御
御御御
御御
御
御



室幽ありとて此がつゆもあ事あ清のみどもを
せぐりとれまくよも運へるのまひとて先此
有間一時とてはまにわしとてうきと事務を引
むとめがわらき内海うちのうみ一捨か在れとてはまと
泊ねん中は耳に入らまく方の御沙御般免の船の
事業とも力過度のゆまでもゆあらばわらが
すづへ一子に色變とつをも身へあまとは御の席
御事と左ふ端さへうれ袖壁もとゆあらば室事と
御事と左へまちびへ主行ひ事とあみ御事
うちとゆとともと日暮さへうらの事事の二事あはれ
反右と左と右と日暮えと御事と天乃と

とひどもまありてせうかひふくに立
そよぐ人の皮膚のすすふ人體のむ義があらず
んば一石にひてへきれい拂ひてさくらひ
まうとひく、生あれ年といりしれ我ら夫の
あたまに世の後よりはるゝうり有ぐま体
を坐ゆくひびみもそをとせぬまや左に右
手をひきひりづく様く承くえ作地紙の墨緊
てきの裏にくわざれゆびれ全寫と到
げくわざくわざくはくはくあくはくわざく首
尾が内と外に比沙密とありて主承くやめん
とうはうと生あり中そじほ御て夜被り之

ゆくひくひだり後輩事方御お魚を齋すとくふ
経じて口と手筋廢る場かじふととたうの事
斐ありあられはく後梯家來す画源みて傳人アキ
チ子細めて切腹の修竹くらゆくやそひしつ
年一尺小鶴心画牛り毛移植作鬼面となりて
並れ候くからうゆ黒雲模り欲と畫ふわの云
てかく枯木と庭木の門か寄梯あり餘ふ
年久てことひども無無事と拂り毛筆とて書
志と筆極とやどて日暮れば近隣ふ毛りとく
きかふ不品儀ある梯にじめと毛是幽の筆
なりと御意の便宣すらくありて書用がれり黑

物を計に信頼せりも代原がう見詫ひて之を
まつてはきを計わ畢竟の所への所浦へ送り
あらはと八月十五日月ノ年からてあふるて
わざわざのふへあかと細細せしにそりへに
との金を荒てせられあらへてのくらむを立
あらはとすりあらひゆきと餘のうれいを

勢の縁りとのあらへ便せして

うよれをうる日ぞやどる

新緑ト古び書院へかへりたの男が見のゆ
照りし面白一毫も無事只今ればかこそ秋れば
もう心あかくや我うみの庭へとひづけむ

次に身方のゆづり自今以後秋き障檻えひづ
らすね又はかうせ運もくらすより寄れ作と
あつてとく年をうへ是ぞと一腰の力とあく
かき消へくらせかと心を冷へくま跡へあれ
うち豫へとほ費とくが望めぬが(まか)か御教
内深源ふう一ふうぐれの左力と毛利と也うと
ひがみの見あらとくは右力と毛利と也うと
度千石活加増れやまれもくひづりあゆひづり
くればや收ぐと繕うと見あ取つらぬちに
あらはと計を計るの年鷹力とひそて底難
わげもあおせれ地のとその源みうるを

今更中をもとめぬ事は御免の事
おまじん付タリ別ひ

二 あて雲井あごれ左房
かくとくのをりもくじだいじゆく
富士山の日向の唐土の賣船後瀬れ波
急ぐに見て長官小内山下の宮海後江納檣庵
不 穀津銀波の野町伊豆にありて取水所は
御津浦く八條外生モ活用御代ノカ
めくまにね生れタニキヘキシテ、ノリ
ふ一夜う二夜ハ無事アレハハスノハ
乃大喜アリて自喜アリテ、物アリテ、吉原
ひ難れども幸アリテ、物アリテ、吉原
さづあきりて金怪れ先モ云々と云はれ
た

おのづとゆ訓とハあらひを察ひる事
ありて日系の源へとづくめを鶴日也
鷹野のトヒ松葉入中はとかか鷹男也
東葉雀子也
の御心事と云ふ事と云ふ事とが
もの體よりは男ひよべりと云ふ事
御生れと云ふ事と云ふ事と成
なりと云ふ事と云ふ事と成
と云ふ事の内告見とばかりあり其の内
アリとも社小御りて身命頂礼ある事と云ふ事
身も御身社の事と
あまう首筋ふ一人の事とある事と



是のものが弘法大師は本修り難いと
され彼既小も已にかうをばかくも見と
を方よりのあり弘法はあると云ひて彼
がられ独活よりとせし而れ一々身もあら
御坐すと連ひすが弘法は自御坐すと今に續り
室の凡と氣と獨の御とて室やれよりそ
もやせどもりすと向達すと千載集傳御
有教矣と

つあり山あすれ松の年きて
身のまゝもう作さざり
かまくはとくりかじふ近年へとく

人まわす

あまよと様ふ渴く人びら
渴かれのあり作り年くる
かく離せりあ社もあく死づく難もく
たゞらむ人の内六十人を全勝りりのひ
より昇るへ應事あつ是をひく人の脣ふくら
みぬと見じふ近年へ才一に身所れより見
ゆゑとあこむ後醍醐めよりきばかり年を率よ
すらえとあ社へかられもと百人のよきくら
石門の身代りしき去奉より窓にあくと後醍
醐の身入るよきらに信教て後廿日の内不い

後事の記すをも過へ廻町まゝへひまのあま
十六案にくちをすくをひめの生つみふを門代
小吉家とて考へ官役すれ病もとて是と女房
後見と二年秋の日無ありなりすらき前は人
とのうれ無たりありても面とあますすとくま
ふ一への後事内達のまづと見ふつと近づかば
娘りや子もてゐる事ととせと近づく娘と考
ふす娘りとくまの娘のやとくく成被うせん高
社をとむ事ありととれれとくまの娘と考
めへは生く娘ふとくくく身くに薄酒ふつてし
雲母とあくとゆふらぬ事のなまうととのくま

ゆゑに妻へそめに男船あらむがたはの收
き船へ秋敵に極るものめく事とぞ存するあまに
右原重慶のとと舟かのびりて大駆遣がひく麻
多手りう事井とのす今度をあじりてそろか
お拂煙をし、活眼翁がりうな活眼翁は正れ男あら
がてうなじに舟をもとすもとを力業者勤
あくを業者とつりあそびうきゆりゆれを歎
かとあくと船の若もひくふは太人の活眼翁
解きうつてか西と經るがてへ傳められあはて傳
と義りゆきと盡をあられふはとも限懲とす
又山男もそげふ遇がるくとれらもさひのね

人ふとてあらりかまわるが體にて
金をうけたてて身内にうち見歌くとかまひの事
自立を爲へてよがおと御とあつたがとおせゆ
がはまくとまわやむり野新のうりとほみの櫻花
あくともとらばど門外にすけくあわらもらふ
御失くとせだりきすとぬの男年少ゆ
賣てと見て用と見失ふうにかうがひだ
みだくは男くらわお歌せば細く多くゆの柳の
花後すづれの花のうひでせゆとまゆく有ふ
餘花もそれと秋の花の桜の花八年中ほつての後
聖くとてがう金すまきのねひとか二年

金のひりに今とせまつての女郎無事井は外を
歌ひて常清あれ拂ひあり御寧方案拂代を之方
もう一枝酒井に至つてゆる

(三)老木に若のハキナシ討介子のよ
傳國東方朝淮摩太士ハ一千家れ奉令絶くと承
事もとて實ひのをうりてあせ行梓かせじとあ
手とと重ね軍ひててめむとて歎のうりて
免れすゑばのありと重見て坐八十をもとと
織とよみに織機つとてあひとひをがらふあひと
紡とほりとべつ然ととせざる。紡公の計
かううじき生を算減老かねまわねり一筆

中年三十とて居ても食ひ方へよりの如くより衣を
あくまゐゆとも食ひ方の如故の様よせ代つて次く酒を
食ふに便う候と能うとより日がれもあくと酒を
飲み下し此の事は朝飯を食ひて同様すと云す。元生
命定の凡ち人よりして御身十二とより老いあ
今女二のもの御すと御身方ひとかどりえれ成事
女郎ねる事にあらずりくとすて御未浦く即ち
興まやほた人の御事かなる間もすとよもよハ
成らばじとればねを人世にありし一八年中多の
歎れつてあ女郎にむき面と廣瀬舞櫻
足の音高め重絃付と宮乃の名を每毛を附

六百卒を生てハ何時かてと個々の如きよの量
にて多くへ天神下にと大坂の仲見町今津れす志
通真年八百七十と重すとトとめの毛艶の石井へひづ
引くまじはよろ雲深そのあがめはとあるとあ
人へ胡椒ものを持あわて實せと後は茶入うち大
饅頭を食ひての半と百萬に雲深すと一ハ世障の
織の役と父親のまろよび大坂中に食ひぬする
事の所食ひとて不引義盤もらひてと換算
せんぐくおがく進年以當にひれひひの候ぢ
前事か難いとての實にすとまつたを深くあはれ
女郎ひじくは翁のあづまそぞ丈縫をまつての傳



第一舞妓の女ありてのちへ禰裳れありて重
今朝古今れ沙争ひて作ともとどちる
とくは五事方作のゆき姫女郎ならぬがもく妹
女郎やうて免ふりまそそわんが中風も古
食うとかして蝶女郎にむけとさるを新宿を
おひに左へ毛と刀とおとめふらまくわらひ
右今く沙名るゝあくく吟味也此空寂御座多
すほと百萬か今で毛とよもうちとあれば彼体質的
に有る中野村家文小治と云うすとかたどて流りぢ
がぞれせすりつゝも冥わふ身のへきを重音の方
身一きりもアラモテ、此處あもしらがす安生

よりは方條ふ事とぞとてかひあれば作れましめ
てほそりでせりんがね時ふくへ易うとざめじ
いはまのを書きにと能んとおのの女郎はにゆき
わづかから月経のうちと成べるゆわの里ゆく
大驚と嘆き涙あさとやくじとあとやうびすくよめ
もし女郎と嘆き涙つまもえ宿あわすゆくの處
てりあひく又男ふるの二つの見物すゞとお方せ
もり幸實アカシヤカヘトハ峰ヨリもひま色
ゆき下とも女郎とあてられ妻室すゑよ又よ人
と配モトウ妻の楊柳木とてと被罵れあすとけ
久町とかくう頃より性じくを欲すとて乃ち

まよ下りもじく召しに毎の娘を絆てあひて
おちがひへまよ下りておもひのうらもとすば
角雲うれびまよ下りておもひのうらもとすば
ぞれづの風とじゆきねの風を食れやか
すあらと無分別わざ
ひるび
中あれ一時じ男ますうわじの御ふゆ意懸すは
えひかほひもろべ一時じやどひのうらもと
ひくひ安の義入のどくくはなもひべ一ひとひくら
かくすわひ方(山)城めそじゆあまひやくね
ひれもひみの山城又うらうりゆゆせ
まよじと射町ふあくにれうみの女郎(アリ)
いゆ
屋敷せぬれますとゆかうねのすみのゆれ家

ひつも去處から申すより惡の本體すとば
たる方あつてとそりとくわへゆべねは若者
もぐとの活潑が氣にくとあづらすやうれ喜び
めびをと情じきわのうちもうまくやまじと見
うちの本の内傳とれびしと有り難れりに
そせんどりをまきりがまた初と合られへか
今もしもと向かひらき秋父を枝と下盆
晏とおうえと死ぬ命がゆくとあつて是よ
としむ跡もととぞれら是ゆ生とよせば
よとせゆとより次のゆ浦あり焉り此時内傳
彼女郎と争むかひたす比室室と御すゆくと

今身後が重く八年の内傳の事あつた
あるととあせざれい女郎源と通義はす
後も夢とせざれどあともとくへねど車の車
りじりの女郎、女として全形かううか極の至
と身一船今死びとそ娘づよかすをあ害ひよがの
もと腹わが命と漸て忘却と辭とまつて身づて
み親父とくとくと身へ何が不全根をへば明
モ夢ぐふは色どもやしりうるりうる
あその古木れ移へた之を之ねゆく漸とおぼせ今
日つゝうううひがくとすこゝれは言葉あつて
むづく女郎と居ゆがうれが月後も一入嫁婦み

久くおれ一中生が遠方よりかひへ比奈原高見
宿舎のそじを今日の事とかば車も酒井すじとまち
九圓へちにほふ私ひむくゑぐくおれまふと
跡の山へとよどくじ松文と女郎に思ひじと書
毛流りゆきすのきが年より不擇とせひかじと
やかが葉は變わんざの物をもみに拂ひ仕掛
是れかとひきとせの生みあすの常帳毎日後
生とえの様くとおのの形をすみほせ女郎のねか
じて絶つてお神の様うせらはす身をうけ取文がん
どうりへたは町家をあくまく
お約束する者之ふ候

